書評

井上　進著
明清學術變遷史
——出版と傳統學術の臨界點——

伊東貴之

本書は、著者・井上進氏の著作のうち、漢籍の目錄類などの編著や譯注・補注などを除く、單行著としては、四冊目に當たる、きわめて浩瀚な大著である。周知の如く、從前の井上氏の著作としては、公刊年順に、既に單著として、どちらかと言えば、啓蒙的な評傳風の『顧炎武』（中國歷史人物選・一〇、白帝社、一九九四）を嚆矢とし、次いで、出版文化史に關わる專著として、たんなる通史としての枠組みや「書物の社會史・文化史」といった域を大きく超えて、傳統中國のほぼ全體に亙る、政治社會史や學術思想史、延いては、廣義の精神史とも稱し得る大著『中國出版文化史——書物世界と知の風景』（名古屋大學出版會、二〇〇二）を經て、やはり書物や出版をめぐる、個別の書誌學的・文獻學的な論攷を蒐集した『書林の眺望——傳統中國の書物世界』（平凡社、二〇〇六）があり、本書は、それらに次ぐものである。[1]

しかるに、本書こそは、これまでの井上氏の研究上の履歷や足跡を知る、大方の讀者にとって、無論、斯界や後學にあっても、永らく鶴首され、待ち望まれた、文字どおり垂涎の書とも言うべき位置にあろう。それは、一見すると、迂闊な讀者なら、些か訝しく思うやも知れない、本書の叙述上の構成にも大きく起因している。以下、本書に所載の各論攷の初出とともに、本書の目次の大概を掲げるものであるが、それぞれの論攷の更にもとになった、シンポジウムなどでの口頭發表に關しては、「あとがき」に詳しいので、そちらに讓り、活字化された初出誌とその刊行年のみを併せて記載しておきたい。

第一部

第一章　文化の雅と俗（→『中國——社會と文化』第二一號、中國社會文化學會、二〇〇六、に所載の同名の論文にもとづく）。

第二章　明代前半期の出版と學術（→「明代中期の出版と學術風氣」、『名古屋大學東洋史研究報告』二九、二〇〇五、並びに、「論明代前期出版的變遷與學術」、『北大史學』第一四輯、二〇〇九、に據る）。

第三章　明代活版考（→『名古屋大學東洋史研究報告』三四、二〇一〇；→なお、同論はまた、これに先立つ「明代活字本小考」、*Creating and Keeping Records in Korea: The 2nd Kyujanggak International Symposium on Korean Studies, 2009*（奎章閣）の改訂版である）。

第四章　明末の出版統制（→『名古屋大學東洋史研究報告』

三二、二〇〇八）。

第五章　明末の避諱をめぐって（↓『名古屋大學東洋史研究報告』二五、二〇〇一）。

第六章　出版の明末清初（↓「明末の出版と出版統制（前編）」、磯部彰編『東アジア出版文化史　こはく』、知泉書館、二〇〇四、にもとづく）。

第二部

第七章　漢學の成立（↓『東方學報』六一、一九八九）。

第八章　復社の學（↓『東洋史研究』四四―二、一九八五、にもとづいて訂補）。

第九章　樸學の背景（↓『東方學報』六四、一九九二）。

第十章　六經皆史說の系譜（↓小野和子編『明末清初の社會と文化』、京都大學人文科學研究所、一九九六）。

以上を瞥見するなら、扱った時代的に見れば、別段、倒叙法という譯ではないのだが、明末清初から清朝一代に至る學術思想史の變遷を集約的に論じた、第二部のもとになった論攷の方がより古く、その多くが一九九〇年代に初出誌に掲載されたものであるのに對して、その後、二〇〇〇年代に入ってから公表された、主として出版文化や國家權力による出版統制を通じて、明代の社會相や學術風氣を炙り出した、より新しい論文群が、逆に第一部を形づくるという體裁となっている。

その意味では、これは、一瞥した限りでは、著者の學問的な問題關心の推移を恰も時間的に遡っていくような構成とも映る。ここで甚だ僭越ながら、個人的な體驗に言及させて頂くなら、實際、著者よりも、十年ほども遲れて、斯界の末席に列なった評者の場合、本書に收載された論攷のうち、第八章に相當し、時間的に最も先行する「復社の學」は、かなり時日を經過した後に漸く繙いたのに對して、二番目に古い「漢學の成立」からは、ほぼリアルタイムで、概ね初出誌上でも閲讀してきたような次第である。おそらく、評者と同じく、陸續と上梓される著者の成果から、常々裨益を受けてきた讀者のなかには、ほぼ一九九〇年代半ばから、取り分け二〇〇〇年代以降、著者の井上氏が、元來の出發點でもあった明清の學術・思想史の內實の考究から、徐々に關心領域の重點をシフトされ、恰も書物世界それ自體の直中に沈潛されてゆかれたかのような、結果としては早合點に過ぎない、些かの誤解を抱いた向きも、あるいは少なからずおられたやも知れない。

だが、本書の行論などにおいて、井上氏自身も屢々述懷される如く、氏の研究對象の表面的な變化や推移は、むしろ考察のための方法論上の異同に過ぎないと見るべきであろう。當初から目指されていたのは、明代の出版史や出版狀況を辿り直すことを通じて、清代の學術や思想にも連なるであろうと目される、その學術の動向や時代的な風尙を明らかにし、延いては、明清の學術に一貫して通底するエートスの在り處やその論理構造を描出しようとされるもので、飽くまでも一貫した問題關心に支えられたものであった。本書を丹念に一讀すれば、この兩者が、深い內在的な連關を伴って、偏に本書自體の構成のみならず、氏の學問世界を構築していることが感得されようし、勿論、明代を中心とした、出版文化に關する研究や考察の方も、たんなる迂路でも、況してや著者が謙遜して言われる「雞肋」などでは更になく、著者ならで

はの周到で緻密な成果を上げたことは言うまでもない。[2] しかるに、にも拘わらず、むしろ初期の作になる、明清の學術・思想史プロパーの諸論攷が再錄されたことで、やはり本書は、文字どおり滿を持して上梓された、待望、渴仰の書と言わねばなるまい。

すなわち、一つには、その間の微妙な差異や屈曲、捩れや歪みをも含めた、明清兩代の學術の聯續性の如何という、斯界年來の大問題に對する、井上氏の見識や斷案が、改めて掌を指すが如くに熟知し得るという點で、また、別樣の見方をするなら、出版をめぐる政治社會史や文化史など、その後の知見をも含み込むようなかたちで、いま一度、著者の初發の地點に回歸し、立ち返ることで、現時點での氏の學問世界が、いわば圓環を閉じるような意味でも、斯界の里程標となるべき著作と言うことが出來よう。

さて、本書全體の構成やその成立の經緯に次いで、ここで、各章のあらましを紹介しつつ、具體的な內容を概觀していきたい。

まず、前半の第一部は、著者も言われる如く、宋學以來の內面主義を極端なまでに推し進めた、內なる主觀主義の權化のような陽明學が、その展開の行き着いた結果、圖らずも外なる客觀主義への道を準備していたのではないか、との前提のもとで、「清代の學術に聯なるであろう外なる知識の學問が、明代においてどのように生じてきたのか、そのことを基本的な問題として常に意識しつつ、明代の出版史をたどろうとしたものに他ならない」。[3] その意味では、著者の立場は、大枠では、その師筋に當たる、島田虔次氏の所說を踏襲しつつ、一面では、それを補強しながらも、他方では、更に一歩、踏み込んで、明清の學術の聯關の所以を解き明かそうとされるものである。[4]

もっとも、明代の出版狀況の如何や出版統制など、その現象面に關する叙述の表層を辿る限りでは、恰も舊著『中國出版文化史――書物世界と知の風景』の後半部で展開された、同時期についての概說や通史のより詳細な各論といった趣がある。すなわち「正學」たる欽定朱子學の壓倒的な權威のもと、また國初や草創期ゆえの社會的な狀況とも相俟って、寥寥たる出版の貧困や單調に彩られた明代前半期から、一轉して明代後半期に入ると樣相は急變し、夥しい洪水のような物量を伴って、出版の通俗化が強力に進展するとともに、文雅の境界さえ溶解しかねない、野放圖な事態が現出するに至る。著者は、取り分けこうした明末的な現象にこそ、中國傳統文化の臨界點を見るのだが、清代に至って、無論、過去の單純な再現ではないとは言え、それは、ある種の「回歸」や平穩、終熄への道に向かうとされる。その他、本書では、前著『書林の眺望――傳統中國の書物世界』などと同樣、中國や臺灣のみならず、丹念な調査によって、各地の日本現存漢籍も幅廣く博搜、涉獵され、それにもとづく新たな知見も踏まえられていることが特筆されよう。

第一章「文化の雅と俗」では、まずは、經籍を中心とする宋元版から、明代坊刻本に至る、體裁や體例の變遷を辿りながら、いま詳言する紙幅はないが、書物それ自體の裡にも刻印された、顯著な俗化現象を追尋しつつ、そうしたいわば讀書の俗化から、正統的な文雅に對しても、やがて鄙俗が自己を肯定し、伸張させるとともに、雅俗の混淆や文雅の變容という事態が、徐々に顯在化していく樣相を活寫する。そこでは、士人による讀書や書物の獨

占が破られ、商賈や書賈が自己主張を始め、清玩にも堪える版畫の利用や封面などのさまざまな意匠とともに、官刻や家刻などの非營利本ではない、端的に商品としての書物が登場し、流行するに至る。李卓吾なり、その名を騙った、批評つき通俗文學書の類は、中下層の周邊的な士人の間では、清代に入ってもなお愛好され續け、かくして明末の通俗的文化は、清代にあっても、伏流化しつつ、存續したとされる。

第二章「明代前半期の出版と學術」では、やはり「正學」のイデオロギー的な制約により、あるいは、民間における出版物の殆どが福建・建陽の產になるような、出版の極度の集中といった狀況下、堂々たる古典的著作の復刊でさえ、漸く明代中期を俟ってであることが、明らかにされる。[5] 次いで、寧波など浙江の相對的な不振の一方で、徽州本、北京坊刻本などの登場を見る。やがて從來の「正學」に對して、徐々にではあるが、聞見の知を道德知から解放し、畢竟、「事」の學である「文」や「史」の領域の自己肯定を通じて、「義」や「理」の追求とは、ひとまず別個の價値を認め得る機運が醸成されてくる。そして、強靱な「內」の確立を目指した王陽明の良知說こそが、その主觀的な意圖を裏切って、かえって「外」なる「事」に關心を向け、それを「義」の拘束から解放する、原理的な契機を與えたことを示唆する。

本章中、取り分け、入矢義高氏の所論を引證しつつ、いわゆる擬古派の主張のなかに、むしろ陽明や後の反擬古派とも符節を合するような立場を看取する邊りなど、蓋し卓見というべきであろう。[6] この點、陽明學などから結果した「內」と「外」との雙方向的・對他的な環流や反轉とも平仄が合い、また、古文辭派や竟陵派、公安派などの諸派の內在的な關聯を看過して、殊更に異別化するような、通俗的な文學史觀への頂門の一針でもあろう。しかるに、同時に著者は、片言隻句の類似を以て、直ちに思想的な親近性を指摘するような、些か性急な論斷を常に愼重に回避していることも、忘れてはならないだろう。例えば、一見、「自己の胸臆」から流出する「性情」の「眞」を顯揚した、袁宏道とも見紛う如き述懷を認めた、蜀懷王の言說に觸れて、むしろそれが、自己と既成道德との完全な一致や同化を意味するに過ぎないことを指摘したり、同じく相似た主張に見えて、宋末の道學者・南宮靖一の言う「經史」の合一が、「事」に假りた「義」の主張、「事」を「道」に解消するものであり、翻って、正德年間に何景明が主張した「經史」の合一は、逆に「道」を「事」の裡に取り込もうとする、いわば「六經皆史說」にも通じるものであって、そのベクトルが正反對である點に注意を喚起していることなどが、それである。

第三章「明代活版考」では、まず蘇州や杭州など、明初期の江浙地域が、大きな打擊を受けて、その先進性や優位性を低下させ、當時の文壇で一世を風靡した李夢陽や何景明らも、總じて江南出身者に非ざることなどに觸れた後に、弘治から嘉靖年間に至って、全國的な古典復興の氣運とも相俟って、俄然、江南において活字本が量產されたこと、そこではやはり知識や文章の學問、道學に對する「文史」や「事」の學問が好まれたことに留意する。同時に、活版印刷の技術的な限界を指摘して、それが必然的に整版へと移行せざるを得なかった所以を考察するとともに、ほぼ同時代の日本の活字本のほか、活版印刷文化を誇った朝鮮の出版文化な

どとの比較の必要性にも言及する。

次いで、第四章「明末の出版統制」、竝びに、第五章「明末の避諱をめぐって」では、著者自身も言われる如く、王朝國家による文化統制、政權の對士人對策という觀點から、明清兩王朝の相應の聯續性を論じたものである。第四章では、弘治・正德から、明末の萬曆、崇禎、そして、清初の政權へと時代を追って、異說・異論や書院・講學への禁壓、文體の釐正や風氣、士習の統制などの諸相を概觀する。清朝は、明朝が解決し得なかった課題について、強權を以て見事にこれを封じ込めることに成功する。だが、順治帝の『御製人臣儆心錄』や雍正帝の『御製朋黨論』に象徵されるような、恰も君主の「好惡」がそのまま「公」であるかのような體制下では、士人の處世もまた、自己欺瞞や撞着に滿ちたものとならざるを得なかったことが示される。第五章では、魏忠賢政權など、明末に至るほど、些か神經症的なまでに言擧げされた「避諱」の問題から、そうした國家統制の內實に迫ろうとする。一面で些事とも言える「避諱」に拘泥する姿勢は、清朝によっても引き繼がれるが、卑見では、それは乾隆期の禁書政策などと同樣、むしろかなり形式的、場當たり的なものと見るべきではなかろうか。

前半部を締めくくる、第六章「出版の明末清初」では、明末刊本と清刊本の不聯續、すなわち、版畫の水準の劣化や蓮牌木記の消滅など、兩者の版刻の風氣や意匠の差異から、擧業書や類書、醫書などをはじめ、俗書たる坊刻本で一世を風靡した、建陽を中心とする福建・その他の凋落、書賈の自己主張の後退など、總じて兩者の斷絕が強調される。清代の版畫と言えば、山水圖と殿版に代表されるが、それは一種の退屈さや單調さへの回歸でもある。また、明末の俗書業界には、第二、第三の李卓吾とも言うべく、多くは下層の士人に過ぎなかった、陳繼儒、鍾惺、艾南英、馮夢龍といった書林の「先生」が存在したが、清初期になると、かかる大立者も地を拂うかに見える。康熙朝の八股文の停止といった措置も追い打ちを掛けたろう。かくして、清代の出版文化は、明末に比して、著しく單調なものと化し、商業性や通俗性、實用性、同時代性などを大きく減退させ、ここに明末の餘風はその命脈を絕ったことが指摘される。

後半の第二部を構成する各論攷は、前述したとおり、その執筆時期も、十餘年以上、遡るもので、明清の間の學術の變遷や隆替それ自體に焦點を絞り、分析と考察の俎上に載せたものである。

まず、第七章「漢學の成立」では、冒頭、清代の學術を特徵づける漢學の內實の如何について、皮錫瑞や梁啓超から、錢穆、侯外廬、嵇文甫、余英時らの所說を紹介しつつ、聞見の知と道德を無關係なものとした王陽明やその末流の立場こそが、知識を道德への隷屬から解放するという意味で、むしろ古學運動とも契合し、かえって知識主義へと趨向する契機を孕んでいたものと推斷した上で、明代の心學から清學への最深部での聯續性を示唆する。(7)

次いで、屢々漢學の先蹤とも目される錢謙益から、「非聖無法」と誹られた鍾惺の評經、「謬種」と論斷された季本、郝敬ら明代の經學を檢討していく。勿論、それらは、乾嘉期などに見られる考據の精度には比すべくもないし、時に謬論、臆說と言わざるを得ない、荒削りな見解も含まれるが、同時にそこには、傳注の權

威や束縛、既成の先入見などに囚われず、自己の識見のみを恃みに、自らの考えで正解を求め、恰も素手で虚心にテキストと向かい合うかのような、明末的な感情とでも言うべきものが深く潜んでいた。そうであればこそ、特に郝敬に關しては、それぞれの評價の程度やスタンスこそ異なるものの、黄宗羲、胡渭、萬斯大、閻若璩、全祖望、姚際恒らの錚々から、江戸期の考證家まで、擧って彼の言説や業績を著しく注視していた譯である。續く郝敬の經學全般、また、その密かな繼承關係の脈絡の檢證こそは、これまで動もすれば、等閑視されがちであった明代經學の實相を解明するものとしても、本章、否、本書中の歴卷でもあり、著者の眞骨頂でもあろう。(8)

さて、著者は、郝敬の『九部經解』を順次、繙いていく。彼は、經書を「經」であるよりも、「書」や「史」として見つつあった。まず『易』については、義理易の立場から、專ら人事を重んじて、その神秘性を否定し、『書』については、辨僞としては、粗略で印象的、初歩的なものながら、古文僞書説を唱え、『詩』『春秋』を「史」と捉えた彼は、『詩』に關しては、自らの意で作者の志に通じるべきこと、斷章取義こそが學詩の要領とさえ述べて、「本義」を否定し、『春秋』の是非に至っては、經書の側ではなく己の側にこそ在ると説く。また、彼にとって、禮の經書は存在せず、『周禮』『儀禮』を端的に「古書」として見た。翻って、性と天道を語らず、民の義を務め、下學上達を説いた『論語』を「六經の精華」として稱揚する一方で、その解釋は己に由るとして、その他の權威を無力化する意味合いもあった。

次いで、こうした郝敬の經説の先驅を辿り、『易』では、胡居仁から、崔銑、楊愼、吳廷翰、歸有光ら、古文僞書説では、梅鷟、焦竑ら、『詩』では、夙くは丘濬らの系譜を導き、『春秋』に關しては、「經」に泥まず、「事」に存する「義」を我が「心」に求めれば足る、とした湛若水、更には、遠く隋唐に淵源する「舍傳求經」の風、あるいは、聖人に直接、聯なろうとする宋學の息吹などとの類似性を指摘する。また、萬世常行の義こそが禮の經であるとして、『禮記』の哲學性は評價するものの、「三禮」は經に非ずと斷じた彼の立場は、胡宏らを更に進めて、禮の器數と義という問題から、經書を「事」や「書」として捉え、「義」は「內」なる「心」の問題として、相對的に獨立する方向を導き、「經」と「書」の分裂へと結果する。そして、こうした立場こそ、「內」を主張することで、經書すら「わが心の記籍」として「外」面化してしまう、王陽明の所説と通底するものであることが論證される。郝敬の「心」や自己への「信」は、「氣」を第一とする存在論に基礎づけられていたが、「心」という「內」なる問題が、所與のものとして解決されるや、かくして、學問の主要な對象や問題は、「外」にこそ在るとされ、聞見の知、博學、政事、文や史が、それ自體として、本質的な意味や價値を持つに至るのであった。

そして、顧炎武らに體現された、「史」が「經」と拮抗するような、「事」の學、知識の學としての漢學の精神こそは、郝敬、延いては、明末の學の後裔であった。その他、郝敬と陳第や王龍溪らとの親近性も示唆される。著者はまた、「內」から「外」へのシフトに伴走して、顏元や戴震、程瑤田や凌廷堪など、時に『荀子』との類似や符合をも思わせるような、「理」より「禮」を

重視する潮流にも言及する。[9] ところで、「經書」を「古書」として捉える、こうした漢學の立場を窮極まで推し進めるなら、經學の自己否定、その「史學」への改鑄へと結果する筈であった。だが、「六經は服鄭を尊び、百行は程朱に法る」（惠士奇）といった言表に象徴される如く、「義理」の世界を依然として程朱の學に委ねざるを得なかった當時において、それは遂に果たされず、清學もまた、明學のある種の「弱さ」を繼承したことを暗示して、本章は閉じられる。

續く第八章「復社の學」は、著者の井上氏が修士論文をもとに練り直した、全國的な學會誌へのデビュー作と言うべき論文がもとになっている。著者は、明末黨爭史における「清議」派の掉尾を飾る、「小東林」たる「復社」系の人士をめぐって、主として既存の研究が、その政治・社會運動の側面に集約されがちであったのに對して、むしろ學術・思想の面から、これを專論しつつ、彼らが、その「古學」や「有用」性への志向、「任俠」「異人」的な傾向などから、高攀龍や顧憲成、鄒元標、黄宗羲ら、東林派系の人士、梅鷟や陳第のような明季の考據家はもとより、泰州學派や李卓吾、更には、何心隱らの如き「心學」の「横流」と目される人びととさえ、何某か共通する心性や思想的傾向を有していたことを論證する。[10] 具體的には、復社の領袖たる張溥、幾社系の中心人物で、『皇明經世文編』を編纂した陳子龍らの經書や經世の學をめぐる議論や學問觀、その友人で、「一大物理世界」を構想した方以智の獨自の哲學體系と認識論などを俎上に載せ、それらの可能性と限界とを考察する。

次いで、第九章「樸學の背景」は、著者も言われる如く、その執筆時期からしても、第七章「漢學の成立」の續編、ないしは、第七章を內篇とすれば、その外篇に當たるものである。元來は、學問の內容ではなく、形式の名であり、自由闊達とは程遠い、只管、古書や個別の事の裡に沒頭し、自らの思想や感情を表現することを徹底して抑制し、回避する、ある種、畸形的なまでの禁欲的な美學を持つ「樸學」は、如何にして生まれたのか。清朝漢學の裡に底流し、伏流水化する明學の精神を示唆する著者は、同時にまた、清朝による士人の統制の奏效という點をも強調して已まない。それは、試行錯誤の中で始まった順治朝の士人統制から、內からの統制を目指した康熙朝の「正學」鼓吹、次いで、體制の意志を剝き出しに、恐怖に訴えるかのような、些か強權的な雍正朝の統制策を經て、右文政策と禁書や文字獄とを併用しつつ、內面の如何は兎も角、外面的には絶對的な服從を迫るという、乾隆政權の諸政策によって、いわば究極點に達するとされる。それは、江南の科場案や奏銷案、復社の活動などに顯著に見られた、明末的な士風の肅正と根絶にこそ焦點があり、江南などで見られた、紳權の政權に對する優位を否定し盡くすことにこそあった。

著者は、こうした一聯の施策の結果、士人たちは、存外、あっさりと敗北し、政權への迎合や媚態に轉化したと見る。かかる體制下での士人の態度は、必然的に、一種の諦觀やシニシズムに彩られたものとなろう。また、復社の人士たちの呆氣ない轉向に次いで、顧炎武や黄宗羲らの政權構想の非現實性や無力が強調される。かくして、著者は、清朝一代を曾て近代西歐が表象したような、閉塞と停滯の時代として結論づけるのである。

最終章の第十章「六經皆史說の系譜」は、一面でやはり先行す

る島田虔次氏らの研究を敷衍し、發展させたものと言えよう。[11]すなわち、通常、章學誠がその主唱者であると通念されている「六經皆史」説について、逆に經書の絶對性や至高性を強調するが故の古來、屢々主張された經史合一説との辨別に注意を拂いながら、その淵源として、王陽明はおろか、「六經はわが心の註脚」という陸象山にその遠い谺を聞き、降っては、むしろ「六經皆文」とも稱すべき王世貞から、胡應麟、何良俊、陳第らの明代の人士の系譜を辿っていく。他方、章學誠の所説の繼承と波紋、清末期に至る受容と流行の様相を詳述した邊りに、やはり著者の技倆や炯眼があろう。曰く、公羊學派の驍將、龔自珍、あるいは、蔣湘南や譚獻・その他のむしろ中下層の人士たちへの滲透ぶり、更には、劉毓崧らを經て、劉師培に至り、諸子學を解放し、傳統學術の總體を「國學」へと改鑄することで、遂にはその終局を見るとされる。また、公羊學との接點と異同にも注意深く言及される。

本章でもまた、「內」なる問題が原理的な解決へと導かれ、「經」の「義」が完全に「內」なるものとされ、己の「義」から見れば、經書すら「外」の範疇に屬するものと見做されるとき、自身と經書との內在的聯關もまた、理論的には喪失されること、「事」の學問の立場から、經書もまた、古の典章制度や掌故を盛った「史」として見たとき、そこに一般の史書との徑庭は、本質的に解消されることが、縷述される。

以上、周到綿密で、蘊奧をきわめた浩瀚な本書を評者なりに概觀することで、多くの紙幅を費やしたが、最後に、あるいは、僭越の譏りを免れないやも知れぬが、ごく簡單に、全體を通じての印象や若干の疑問點、著者への希望などを認めておきたい。

まず、著者の言われる明學から清學への推移を象徴する構圖として、「內」から「外」へというシフトや轉換が擧げられるが、本書に收載された諸論攷を改めて讀み直してみて、印象深かったことには、「知識主義（道問學）」と「反知識主義（尊德性）」の兩者の隆替や相克として、朱子學以降の近世思想史を描出された余英時氏の觀點が、動もすれば些か表層的な異同を強調し過すぎる嫌いがあるのに對して、思想の進み行きのトレースとしては、結論として、相似た部分を含みながら、井上氏のそれは、「內」の問題が原理的な決着を見ることで、「外」への興味や關心が釀成されるという、相互的で對他的・對自的な契機や逆轉と環流のダイナミズムを含み、ある意味で哲學的、實存的とも言うべき考察を伴った問題構制となっている點に特徴があろう。また、明學から清學への基本的な聯續性という點に關しても、全體的な力點としては、島田虔次氏の見通しより、より少しく踏み込んだ印象を覺えた。

しかるに、言われることの意味は良く分かるのだが、同時に「義」の學から「事」の學へ、「經」や道德と「文」「史」の分裂や後者の自立、「經學」の「史學」や國學、諸子學などへの改鑄や變貌に、近代的な實證の學問への進展を認めるという、基本的な構造の裡には、やはり何某かの進歩史觀、と評するのが大仰なら、やはり近代主義的な見方が刻印されているのではあるまいか。翻って、些か大膽な物言いをするなら、「義理」と「經世」や「文史」との聯結が、遂に途絶えなかったことの方を再評價するような立場とて、一概に否定し去ることは出來ないのではないか。

事の當否の問題と言うより、それは畢竟するところ、文明の質や型の相違の問題かも知れないからである。また、事實的な認識としても、例えば、D・ニブスン氏らの如く、章學誠の所說をヘーゲルのそれに準えるような議論は、些か極端な見立てだとは言えようが、やはり彼は「事」の根柢に貫徹する「道」への強烈な志向性を秘めていたのではなかろうか。[12]

また、道德知と聞見の知、ないしは知識としての學問の分離という觀點から見ても、少なくとも、王陽明なり、郝敬なりの生きた時代、明代中葉から明末、十六～十七世紀の時點で考えれば、むしろ中國の相對的な先進性は、彌が上にも強調されて然るべきであろう。熱氣を伴った思想的なムーブメントという點では類似してはいても、陽明學の發生とほぼ時を同じくするルターの宗教改革なり、それに對抗した反宗教改革なりは、著しく宗教的な運動であって、中國の思想文化の世俗性には、際立ったものがあるし、西歐の場合とて、宗教的な權威に抵抗して、啓蒙思想が新知見を拓き、キリスト教の影響力が相對的に減衰するのは、早く見積もっても、せいぜい十七世紀の末、やはり何と言っても十八世紀を俟たねばならなかった。その他、宗教改革の前提要件として、印刷術の進歩が存したことは、最早、定論と言って良かろうが、逆に明代における出版文化の隆盛に關しても、明學の精神の顯現といった側面のみならず、銀の流通の飛躍的な增大など、當時の世界大での經濟的好況にも影響され、惠まれるところがあったように推察される。

さて、著者は、底流や深層においてではあれ、明清の學術の基本的な聯續性を指摘される一方で、それが清代において強權的に封じ込まれたとの立場に左袒される。もっとも、著者の場合、それは王朝國家による士人の統制、文體や士習の問題、政權による「正學」の鼓吹など、基本的には、明清兩王朝に聯續した構圖のなかで捉えられており、明朝が貫徹し得なかった施策に關して、清朝がむしろ相應の成功を收めたとの見解によるもので、清朝の異民族政權としての側面を過大視する見方とは袂を別つ。しかるに、そうであっても、やはり清朝を近代西歐が表象したような、閉塞と停滯の時代と見做していることに變わりはない。かかる見方は、ヨーロッパ研究のなかでも、オリエンタリズム批判の擡頭とともに、最早、再考に付されていることは暫く措く。[13]だが、やはり事實認識としても、それは事の一面の眞實ではあっても、清代という時代の全貌とは言えないのではあるまいか。

遺臣を遙かに上回る貳臣の存在は、清朝による士人への彈壓や懷柔、彼らの政權への迎合や轉身という側面を考慮に入れてもなお、やはり清朝が明末の弊政をある程度、一掃し、明朝に比して、概して善政を敷いたとの見方によらなければ、整合的な說明がし難い部分があるのではなかろうか。[14]また、清初期における程朱學の復興の裡には、政權による奬勵のほかにも、在野の士人層をも含めた、何某かの秩序の回復への志向が見て取れるように思われる。そうでなければ、本書中でも屢々引證される人士のうち、陸隴其や張伯行のような大官はともかく、陸世儀や張履祥のような在野の「醇儒」、更には、あの曾靜・呂留良案こそ、偶然の要因も多かったとは言え、やはり些か反體制的な思想の持ち主であることは間違いない、呂留良らの人びとが、程朱學に依據した內面的な動機が說明し得ないのではないか。[15]

次いで、清朝の漢學、樸學を支える精神態度について、著者は、あくまでも醒めた、些か冷淡な視線すら注いでいるが、果たしてそれは、やはり眞實の一半を出ないのではあるまいか。著者の場合、あくまでも古書それ自體の襞や行間に分け入るという、正攻法からの解析や叙述にほぼ終始し、同時代の他の研究者の所説に言及されることは、殆ど見られないのだが、近年、著者の見方とは、かなりの徑庭のある清朝考證學への理解が、相次いで上梓されている邊り、どのように評價されるのであろうか。例えば、當時の人文開花的な狀況を強調される、大谷敏夫氏やB・エルマン氏、若干のスタンスの違いこそあれ、その背後に何らかの「情熱」の存在を指摘される、木下鐵矢氏や吉田純氏、また、それぞれ根強い「經世」の志を看取される、大谷氏や木下氏、「儒學的形而上學」の基礎を指摘される、濱口富士雄氏など、同時代の諸研究に對する著者の評價も伺いたいところである。[16]

翻って、清朝治下の紳衿、士人たちは、著者が言われるほど、事ほど左樣に芯のない、自己欺瞞や諦念、冷笑的態度に滿ちた「弱い」人びとなのであろうか。一面で、そうした含意も一概に否めないとは言え、彼らの轉身や處世は、逆の見方をすれば、彼らなりの保身、否、むしろ強かさの自己表現ですらあったのではなかろうか。また、慥かに阿諛便佞という他ない、盛世の贊美の言説も、李光地のような道學官僚のみならず、趙翼や焦循など、その例に事缺かない。だが、國家權力に對して、どの程度の距離を取り、如何なる姿勢で相涉るかは、その時々のむしろ實踐的、功利的な要求や戰略の問題に過ぎなかったのではないか。加えて、士人たちの多くが、立身や致富に關心を集中させていたのは、否定すべくもないが、また、地域社會での威信なり、功利的な關心も隨伴していたとは言え、一方で、ローカル・エリートとしての彼らが、慈善や社會事業にも、殊の外、熱心であったこともまた、事實であろう。[17]

ここで、末尾に、やはり些か印象批評的になるが、特に郝敬らの經學などから受けた感懷を認め、また、望蜀の感もあるが、著者への希望めいたことを記して、締め括りとしたい。

さて、曾て例えば、戴震らと我が伊藤仁齋などとの類似性や共通點を指摘した上で、仁齋の方が、戴震や清朝考證學に百年ほども先行している、といった議論がなされたことを御記憶の向きも多いであろう。[18] しかるに、評者には、『論語』を絶對視して、他の經書を相對化したり、『詩』を人情や文學の書として見る契機を導くなど、郝敬と仁齋にも、多くの共通點があり、荒削りではあっても、議論の素地や論點の提示それ自體は、剩え仁齋に遙かに先驅けているやに思われる。また、彼に加えて、「六經皆史」説や「事」の學問の系譜の裡には、「世は言を載せて以て遷り、言は道を載せて以て遷る」(『學則』二)、「學問は歴史に極まり候」(『徂徠先生答問書』上)と喝破した、徂徠への遠い反響を聞く思いがする。翻って、簡易を尊び、傳注から相對的に自由な經書解釋や史學を志向した點では、廣義の宋學の草創期、歐陽脩の學問などとの一定の契合にも思い當たる。[19] しかるに、おそらく傳統中國にあっては、同じく徂徠の「諸子百家九流の言よりして佛・老の頗に及ぶまで、皆道の裂けしのみ」(『學則』六)といった、すぐれて價値相對主義的な認識に辿り着くことは、善かれ惡しかれ、殆ど稀なことであったのではなかろうか。

その他、著者は、顧炎武や黄宗羲らの政策論の非現實性や無力を言われるが、人間觀や言語觀、歴史や文學に關して、あれだけの炯眼を發揮した徂徠の場合とて、一旦、政策論になると、かえって復古的な夢想にも近いものであったと言わざるを得ないのではなかったか。[20] また、出版文化における雅俗の混淆、「雅」の俗化や反對に「俗」の雅化といった現象は、まさに明末の文化からも多大な影響を受けた、我が江戸文化の特質でもあり、兩者の比較・檢討なども、個別分野を超えた大きな課題の一つと言えよう。[21] さまざまな思索に誘われるのも、本書の功德の一つであろう。著者には、何時の日か、島田虔次氏が構想つつも、遂に果たされなかったような、東アジア規模での儒學史の比較や檢證を試みて欲しいと願うのは、ひとり評者だけではあるまい。

註

（1）その他、井上進氏の著作としては、編著として、『三重縣公藏漢籍目錄』（三重縣圖書館協會、一九九六）、共編著として、『金澤市立玉川圖書館近世史料館藏漢籍目錄』（淺野純一氏との共編、金澤市立玉川圖書館近世史料館、二〇〇四）などがある。また、譯注書として、『明史選擧志1』（酒井惠子氏との共譯注、平凡社・東洋文庫、二〇一三）、補注を施したものに、島田虔次『中國における近代思惟の挫折1・2』（平凡社・東洋文庫、二〇〇三）、入矢義高『增補　明代詩文』（同前、二〇〇七）がある。

（2）「雞肋」とは、『後漢書』楊修傳に典據し、言うまでもなく、雞の肋骨、取るに足りないが、捨てるには惜しいものの比喩。彼の井伏鱒二もまた、その隨想集にこの名を冠していることを御記憶の向きもあろう。ここで、井上氏の謙辭とは、前掲『中國出版文化史――書物世界と知の風景』（名古屋大學出版會、二〇〇二）の「はじめに」に見えるもの。

その他、『書林の眺望――傳統中國の書物世界』（平凡社、二〇〇六）に收錄された、「四部分類の成立」（初出『名古屋大學文學部研究論集』一三四、一九九九）、「北溪字義版本考」（初出『東方學』第八十輯、一九九〇）などを除く、出版文化史に關する井上氏の主な論攷としては、他にも「藏書と讀書」（『東方學報』六十二、一九九〇）、「書肆・書賈・文人」（荒井健編『中華文人の生活』、平凡社、一九九四、所收）、「出版文化と學術」（森正夫編『明清時代史の基本問題』、汲古書院、一九九七、所收）などがあり、本書の理解の一助としても、それぞれ參看されたい。

（3）本書の「自序」を參照。引用は、同・六頁。

（4）島田虔次氏の所說に關しては、特に『中國における近代思惟の挫折』（筑摩書房、一九四九：同・改訂版、同前、一九七〇：のち井上進・補注、平凡社・東洋文庫版（上・下）、二〇〇三）、竝びに、『朱子學と陽明學』（岩波新書、一九六七）、參照。

因みに、島田氏の場合は、一方で、黄宗羲、顧炎武や淸初の朱子學者たちなどが、「廣義における明學的雰圍氣のうちに身を置いていた」として、「その根柢に深く聯續なる基礎構造」（引用は、前掲『中國における近代思惟の挫折』、筑摩書房版、序・五頁）を指摘されるほか、淸朝漢學は、「もっ

とも深い意味において明の心學の聯續であり、展開であった」（同じく『朱子學と陽明學』一九六頁）のではないか、とも示唆されるが、基本的な構圖としては、やはり「明清の非聯續」を確認しつつ、何と言っても明末時期における「挫折」を強調されるものと考えられる。

その他、明清の際の學術思想の聯續や非聯續に關する、島田氏をはじめとする先學の諸家の所說については、拙稿「明清思想をどう捉えるか ―― 研究史の素描による考察」（奥崎裕司編『明清はいかなる時代であったか ―― 思想史論集 ――』、汲古書院、二〇〇六）を參看して頂ければ、幸いである。

（5） 福建・建陽における商業的な出版の隆盛に關しては、夙にルシール・チア教授の大著『營利出版 ―― 福建・建陽の商業出版者：十一～十七世紀』がある。Lucille Chia, *Printing for Profit: The Commercial Publishers of Jianyang, Fujian (11th-17th Centuries)*, Harvard University Press, 2002.

同書に關してはまた、高津孝「書評・紹介：ルシール・チア著『營利出版 福建・建陽の商業出版者（十一～十七世紀）』」（『東洋史研究』第六三卷・第四號、二〇〇四）、參照。同書は、米國において、近年、活況を呈しつつある、中國の出版文化に關する研究に先鞭をつけた、代表作とも言うべきものであるが、全般的な研究狀況を概說したものとして、同じく高津孝氏によるレビュー「米國の中國出版文化史研究」（『中國 ―― 社會と文化（20年記念號）』第二十號、二〇〇五）が豐富な情報を含み、有益である。

なお、時代が下るにつれて、また、特に清代に入ると、福建や建陽の地位が大幅な低下を見ることも、夙に指摘されている。本書・第六章に加えて、前掲のルシール・チア著のほか、金文京『三國志演義の世界』（東方書店、一九九三：同・增補版、二〇一〇）、中砂明德『江南 ―― 中國文雅の源流』（講談社選書メチエ、二〇〇二）の終章など、參看。

（6） 入矢義高『明代詩文』（筑摩書房、一九七八：同・增補版、平凡社・東洋文庫、二〇〇七）、「擬古主義の陰翳 ―― 李夢陽と何景明の場合」、參照。

更に、井上氏は、本書・第三章において、青年時代の王陽明が、一時期、擬古派の運動に熱中したことに觸れて、そこにはたんなる偶然以上の所以があるものと推察しておられる。本書・九三頁、參照。

（7） この點、井上氏も示唆される如く、宋學以降の近世思想史の推移を「知識主義（道問學）」と「反知識主義（尊德性）」の兩者の隆替や消長として說明される余英時氏が、王陽明の立場を「超知識的」と評しているのは、きわめて暗示的であろう。余英時『中國思想傳統的現代詮釋』（臺灣・聯經出版事業公司、一九八七：→江蘇人民出版社、一九八九）、參照。

（8） 明代の經學の裡に、清代漢學への濫觴を見るものとしては、夙に宮崎市定「四書考證學」（『石濱先生還曆記念論文集』、關西大學東西學術研究所、一九五二：→のち、『アジア史研究』第四、東洋史研究叢刊四－四、東洋史研究會、一九六四：→更に、『宮崎市定全集17 中國文明』岩波書店、一九九三、に再錄）、酒井忠夫「清代考證學の源流」（『歷史教育』

五―十一、一九五七）、吉川幸次郎「錢謙益と清朝「經學」」（『吉川幸次郎全集』第一六卷（清・現代篇）、筑摩書房、一九七〇：→初出は、『京都大學文學部研究紀要』九、一九六五）、佐野公治『四書學史の研究』（創文社・東洋學叢書、一九八〇）、などがある。また、明季の經學全般に關しては、林慶彰『明代考據學研究』（臺灣・學生書局、一九八三：同・修訂再版、一九八六）、『明代經學研究論集』（臺灣・文史哲出版社、一九九四）が有益である。但し、何れも郝敬への直接的な言及は殆ど見られない。

なお、郝敬に關する論攷としては、我が邦でも、夙に岡田武彥『王陽明と明末の儒學』（明德出版社、一九七〇：→のち『岡田武彥全集』第10卷・第11卷（上・下）、同前、二〇〇四）に「郝楚望」、同『宋明哲學序說』（文言社、一九七七：→のち『宋明哲學の本質』と改題して木耳社より改訂版、一九八四）に「郝楚望の思想」の項目があるほか、荒木見悟『中國心學の鼓動と佛教』（中國書店、一九九五）所收の「赦敬の立場――その氣學の構造」があるが、むしろ彼の心性の學や氣論に焦點を當てたものである。その後、經學に關わるものとしても、川田健「郝敬春秋學の一側面」（『早稻田大學文學研究科紀要』第43輯、一九九七）、村山吉廣「明儒郝敬の詩解」（同前・第44輯、一九九八）、川田健「郝敬の文章論」、西口智也「郝敬の賦比興論――その「興」說を中心に――」（ともに『村山吉廣教授古稀記念中國古典學論集』、汲古書院、二〇〇〇）などが現れたが、何れも個別の經書を俎上に載せたものであり、無論、井上氏の本論を踏まえる。

（9）この點、大谷敏夫氏は、汪中や焦循などとも併せ、孟子と荀子を兼採した「孟荀學」とも言うべき系譜として描出される。大谷敏夫『清代政治思想史研究』（汲古書院、一九九一）、第二部・第二章「揚州・常州の社會と學術」、參照。また、特に凌廷堪の「禮」說に關しては、張壽安『以禮代理――凌廷堪與清中葉儒學思想之轉變』（臺灣・中央研究院近代史研究所、一九九四：河北教育出版社、二〇〇一）、參照。

（10）本書でも前提とされる、既往の代表的な復社に關する研究としては、謝國禎『明清之際黨社運動考』（商務印書館、一九三四）、宮崎市定「張溥とその時代」（『東洋史研究』三三―三、一九七四：→のち『アジア史研究』第五、東洋史研究叢刊四―五、東洋史研究會、一九六〇：→更に、『宮崎市定全集13　明清』岩波書店、一九九九、に再錄）、小野和子『明季黨社考――東林黨と復社』（東洋史研究叢刊之五十、京都大學學術出版會、一九九六）などがある。

（11）島田虔次「歷史的理性批判――「六經皆史」の說」（講座『哲學』第四卷、岩波書店、一九六九）、同「章學誠の位置」（『東方學報』四一、一九七〇）（→のちともに、『中國思想史の研究』、東洋史研究叢刊之五十九、京都大學學術出版會、二〇〇二、に所收）、川勝義雄『中國人の歷史意識』（平凡社選書、一九八六：→のち平凡社ライブラリー、一九九三）など、參照。

（12）David S. Nivison, *"The Life and Thought of Chang Hsüeh-ch'eng, 1738–1801"*, Stanford University Press, 1966.、前掲、川勝義雄『中國人の歷史意識』、更には、山口久和『章學誠

の知識論』（創文社・東洋學叢書、一九九八）など、參照。

（13）オリエンタリズム研究の近年の達成として、大野英二郎『停滯の帝國――近代西洋における中國像の變遷』（國書刊行會、二〇一一）を是非とも擧げておきたい。

（14）例えば、清朝が、明朝の官田、王府莊田の解放など、取り敢えず、明末の弊政を一掃した點については、佐藤文俊『明代王府の研究』（研文出版、一九九九）、また、清朝政權を翼賛した「貳臣」に關しては、岡本さえ「貳臣論」（『東洋文化研究所紀要』六八、一九七六）をそれぞれ參照されたい。

（15）この點、拙著『思想としての中國近世』（東京大學出版會、二〇〇五）、第四章「〈秩序〉化の位相」をご參看願えれば、幸いである。

（16）Elman, Benjamin A., *"From Philosophy to Philology: Intellectual and Social Aspects of Change in Late Imperial China"*, Harvard University Press, 1984.、前掲、大谷敏夫『清代政治思想史研究』、濱口富士雄『清代考據學の思想史的研究』（國書刊行會、一九九四）、木下鐵矢『「清朝考證學」とその時代――清代の思想――』（創文社・中國學藝叢書、一九九六）、吉田純『清朝考證學の群像』（創文社・東洋學叢書、二〇〇七）など、參照。

（17）J. W. Esherick & M. B. Rankin, *"Chinese Local Elites and Patterns of Dominance"*, University of California Press・1990.、夫馬進『中國善會善堂史研究』（東洋史研究叢刊之五十三、同朋舍出版、一九九七）、森正夫著『森正夫明清史論集』（全三卷、汲古書院、二〇〇六）、溝口雄三「辛亥革命の歴史的個性」（『思想』第九八九號・二〇〇六年九月號：↓のち『中國思想のエッセンスⅡ――東往西來――』、岩波書店、二〇〇一、に所收）など、參照。

（18）吉川幸次郎『仁齋・徂徠・宣長』（岩波書店、一九八〇）、余英時『論戴震與章學誠――清代中期學術思想史研究』（龍門書店、一九七六：東大圖書公司、一九九六）など、參照。

（19）伊藤仁齋や歐陽脩に關しては、特に次の諸論攷から多くの裨益を受けた。中村幸彦『近世文藝思潮攷』（岩波書店、一九七五）、特に同・所收「「文學は人情の道ふ」の說」、芝木邦夫「歐陽脩の史學思想」（加賀博士退官記念論集刊行會編『加賀博士退官記念　中國文史哲學論集』、講談社、一九七九）、土田健次郎「歐陽脩試論――理・人情・自然・簡易」（『中國――社會と文化』第三號、一九八八）、同「伊藤仁齋と朱子學」（『早稻田大學文學研究科紀要』第42輯、一九九六）、渡邊浩『近世日本社會と宋學（增補新裝版）』（東京大學出版會、二〇一〇）、特にその「補論1：伊藤仁齋・東涯――宋學批判と「古義學」」など、參照。

（20）渡邊浩『日本政治思想史［十七～十九世紀］』（東京大學出版會、二〇一〇）、第九章「反「近代」の構想――荻生徂徠の思想」、參照。

（21）中野三敏・監修『江戸の出版』（ぺりかん社、二〇〇五）など、參照。

※小稿は、日本學術振興會・科學研究費補助金・基盤研究（B）「公共知の形成――東西比較による十八世紀學の展開」

（代表者：金城學院大學・高橋博巳）、同じく、基盤研究（C）「考證學、言語の學、そして近代的知性――近代的學問の「基體」としての漢學の學問方法」（代表者：國士舘大學・竹村英二）、竝びに、基盤研究（C）「心・身體・環境をめぐる「仁」概念の再檢討――『朱子語類』卷4～6を中心に」（代表者：東海大學・恩田裕正）のそれぞれ研究分擔者としての成果の一部である。御高配を戴いた關係の諸機關と各位に深謝するものである。

二〇一一年一一月　東京　平凡社

A五判　五三六頁　六五〇〇圓＋税